



# LA NOUVELLE

## N°23

### AUTOMNE

東京外語仏友会  
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10  
本郷サテライト 東京外語会気付  
発行責任者 藤倉洋一 (1970/昭45)  
2019.10.1 発行

## 第24回仏友会総会

4月14日(日)恒例の仏友会総会が東京・大手町サンケイプラザで開催され、総勢60名の出席者で賑わった。

藤倉会長の挨拶、金澤副会長の会務報告の後、会計・監査報告が承認された後、秋廣尚恵先生(昭53)から母校の近況報告をいただいた。

講演会の部では、建築ジャーナリストの淵上正幸氏(昭44)を講師に迎えて、『現代世界建築を展望する：デザインの秘密』との演題でお話しいただいた(内容は、ご本人による下記レジュメをご参照ください)。

講演会終了後、恒例の記念撮影を行った。唯一の現役学生は、昨年秋の外語祭の仏語劇『シェルブールの雨傘』で主役を演じた長野遙さん。続く懇親会では、ワイングラスを手に、参加者一同仏友会伝統の和気藹々の雰囲気と会話を楽しんだ。

(幹事 中村日出男 昭49)



昭和45年卒までの出席者と現役学生

し編集するという、願ってもない仕事 came。これには東大出身という肩書きが大いに効を奏した。というのは、語学ができるイメージがあり、編集者で外国語ができると海外取材は非常に便利だからだ。こうしたことから、海外建築系の仕事は僕に来るケースが多くなった。この出版計画は大成功で、僕は今もってこの時の編集費を超える高額な手当をいただいたことはない。

さらに、この仕事による「海外建築事情への精通+外国語」というシナジー効果により、初めての海外建築ツアーという新しい仕事が舞い込んだ。最初は非常に緊張した。なぜなら建築学科を出てない人が、建築学科を出た建築家たちを連れて建築を見学に行くのだから。僕はこの種の建築ツアーに、世界の著名建築家の事務所訪問を加えたが、これは大人気となった。

海外建築ツアーは年に3~5回してきたが、今では百数十回に及び、北はアイスランドから南はアルゼンチンまで世界中を見学してきた。そのため建築写真が増えて、この膨大な資料を利用しない手はないと思っていた。そこでカラー写真を4~5枚と図面などを使用し、自分が原稿を書くという大変な出版計画を考え、親しい会社に提案すると、それがすんなり通ってしまった。

さあそれからは大変な苦行の連続。若さゆえの大胆なやる気のなせる業だが、やっと『ヨーロッパ建築案内』第1巻を出す大変な売れ行き。その余勢を駆って2巻、3巻を出す、「学生や建築家のバイブル」というニックネームをいただいた。『アメリカ建築案内』もバイリンガルで1巻、2巻を出した。この

## ある建築ジャーナリストの軌跡

淵上正幸 (1969/昭44)

僕は大学卒業後就職した大企業をやめ、ふとしたことで、雑誌『新建築』を刊行している新建築社に入社した。そこで初めて建築という芸術分野の一翼を担う文化領域に興味を覚えた。以来同社に18年間在籍。その最後の4~5年間、系列会社の『a+u』という海外建築を紹介する雑誌社の編集部にも在籍し、内外建築の編集的知識を習得した。

シネクティックスという建築編集会社を立ち上げたのは、自分が習得した知識を活用して、できる限り他人(他社)や自分の活動を、執筆、出版、インタビュー、講演などで発表することが目的であった。そこで自分の肩書きが必要となり、「建築ジャーナリスト」というタイトルを日本で初めてつくった。会社としては、業界の仲間や知り合いから書籍出版のための取材・編集の仕事を頼まれ、順調な滑り出しであった。

その中のひとつに建築の豪華本を出版するために海外取材を



## 「外語」と私の半世紀

渡邊啓貴 (1978/昭53)

私は今春、24年間勤めた母校を退職しました。在職期間中、仏友会の皆様には多大なご支援を賜り、心から御礼を申し上げます。またこのように離職に際してご挨拶文を寄稿する機会もいただき、大変感謝しています。

学生運動の余燼が燦るキャンパスから私の学生時代は始まりました。1年生の外語祭の折、日新寮の学生が1号館をバリケード封鎖し、それに抗議してつくったスクラムの最前列に私はいました。渋谷や池袋の小さな芝居小屋で前衛派・寺山修司の作品上演のお手伝いをしたこともありました。私は千葉県立船橋高校出身だったので、成田空港建設・安保反対闘争に揺れた高校生活でしたが、大学生生活は反転する時代の風潮に抗うことはできませんでした。

2年生の時自ら買って出た外語祭副委員長の折に仏友会創設者の故後藤篤先輩にお会いしました。その後時々お話を伺いに行くようになり、留学時代の藤田嗣治や孫文との付き合いから始まり、外語に貿易学科を設立した話を、鰻や天麩羅をご馳走になりながら拝聴しました。外国語教育は伝統だが、実社会で外語出身者が影響力を持つようにするためにどのような大学教育が望ましいのか、熱心に語られていました。

もう少し勉強したいという気持ちだけで将来のことには半ば目をつむって、人生最後の自由な時間と覚悟を決めて飛び込んだ大学院修士学生の生活は、バイト以外は寸暇を惜しんで勉強に集中しましたが、そのライフ・スタイルが結局一生続くことになりました。他方でドイツ語の同僚と、今では外語最大のサークル「オレンジ・テニス」を創設したこともよい思い出です。

後藤先輩には修士終了を前にして就職探しのお願ひに行きましたが、好きで大学院の門をたたいたのなら博士に行って勉強しろ、と2時間かけて懇々と説かれました。すでに私の本心を見抜かれていたのか、若いのに生活のことなどでよくよするな、と少し考えさせられる叱責も受けましたが、結局言われたように私は博士課程に進学しました。

2年半のバリ留学から戻った直後に京都外国語大学に赴任しました。バブル絶頂期の浮かれ騒いだ世情の京都の賑わいを6年間享受した後、私は懐かしい西ヶ原キャンパスに戻ってきました。着任直後、休み時間に福山雅治のヒット曲を練習する調



子外れの男子学生の歌声が聞こえてきた時には、もはや過半数を超えた女子学生の賑わいととも、時代の変化を痛感しました。私が母校に戻るにあたってご尽力いただいた故中嶋嶺雄学長はもとより、二宮宏之先生、渡瀬嘉朗先生、西永良成先生らに暖かく迎えられたことを昨日のように思い出します。後にパリ大学都市日本館館長になられた西永先生とはパリでお仕事を一緒にさせていただきました。

毎年年齢が確実にかけ離れていく学生たちの気質を追いかけつつも、学生には迎合することなく自分を貫いたつもりです。扱いにくい教師の1人だったと思います。しかしそれは良くも悪くも私なりの若い人たちへのメッセージとなるはずだと信じた四半世紀でもありました。幸いなことに優秀な学生に恵まれ、250人以上のゼミ生が在籍しましたが、大多数の学生が内外の大手企業で、40人近くが国際公務員を含む総合職・専門職として官公庁や大手メディアで活躍しています。大学教員も数名います。10年ほど前に出向で在任大使館に広報文化担当公使として赴任し、日仏外交百五十周年記念行事に駆けずり回ったのもよき思い出ですが、当時大使館には現在 OECD で活躍中のゼミ生神陽介君がいました。この10年ほど在任大使館広報部には外語出身者が常駐しており、現在ゼミ生2人を含む教え子が3人在職中です。

ただ退職に当たって、外語の将来には不安を禁じ得ません。老舗の国立大学で多くの優秀な学生を輩出しているにもかかわらず、社会的存在感は大きくありません。2・3学部制になったとはいえ、教育・研究体制は改善されたとはいえません。中嶋学長時代に社会に向けた将来設計のお手伝いをしましたが、大学院・リカレント教育、国際会議場として「西ヶ原キャンパス」を残すという北区との進行中だった共同計画は代替わりで霧散しました。

この3月退職に際してゼミ生が中心となって(親しい同窓生も駆けつけてくれました)、最終講義と謝恩会を120人以上が集まって開催してくれましたが、感無量でした。文字どおり一区切りができた気持ちで感謝に堪えません。

私はフランス外交史から始めて、現代フランス政治・外交(史)、欧州統合、米欧関係を研究テーマに、単著を8冊出版しましたが、あと4冊書いて区切りとし、その後はもっと軟らかいものを書いてみたいと思っています。

4月からは帝京大学法学部でこれまでと変わらぬ生活を送っています。従って皆さんとは今まで通りお付き合いさせていただきたいと思ひます。改めて今後とも宜しくお願いします。

頃になると、建築学科出身でない僕もかなり知られるようになった。講演やインタビューで地方に行くと、多くの建築家が「淵上さん、ガイドブックのお世話になっています」と言ってくれるのが非常に嬉しかった。

講演会は海外建築情報を紹介する内容だが百数十回に及び、北は北海道から南は九州まで、日本のすべての地方をカバーしたが、東京、大阪、名古屋、福岡、広島、札幌など大都市が多い。対象は大手設計事務所や大学、たまに公開講演会だ。地方に行った時は必ずその地方の建築を見学してくるので日本建築の写真も多数あり、海外と合わせると数十万枚になる。スライドの時代からデジタルの時代にまたがった資料だ。それらを使用した連載記事もメインの仕事で、月に数本の連載があり、そのうちのひとつは15年ほども続いている超ロング連載だ。

インタビューは世界の著名建築家100名ほどにしたものを、『世界の建築家51人』1巻&2巻として出版。日本の建築家へのインタビューは20年ほど続いた。僕の仕事は先述した、執筆、出版、インタビュー、講演の他に、建築家コーディネーターがある。海外の著名建築家を呼んで日本で建築を設計してもらったり、また講演をしてもらう仕事。前者で有名なのは、「電通タワー」「東京駅八重洲開発」「東京ミッドタウン」だ。なお僕の著作10数冊は本学に寄贈済みです。

以上のような特に海外建築や建築家の紹介や海外建築ツアーなどの業績で、2018年に「日本建築学会文化賞」を受賞できたのは、良き仲間やクライアントのお陰でいただいた生涯最高の贈り物である。



昭和46年卒以降の出席者と現役学生

## 第25回サロン仏友会のお知らせ

《講演とボジョレ・ヌヴォを楽しむ会》

日時：2019年11月24日(日)午後2時~5時

会場：本郷サテライト 3F・7F

参加費：3,000円

同時に2019年度分通信費(1,000円)も申し受けます。

《講演》 午後2時~3時15分

講師：吉竹純氏(1972/昭47) 短歌愛好家

演題：「天皇陛下にお会いするまで」

—あるコピーライターの軌跡—



吉竹氏は福岡県出身。大学卒業後、株式会社電通に入社。2000年に、51歳で早期退職するまで、同社のコピーライター(専門職)として勤務された。退社後も、コピーライターとして活躍する傍ら、新聞歌壇に投歌、多くの作品が入選・受賞している。氏は、短歌のみならず、小説、俳句にも意欲的だが、平成23年には歌会始(お題「葉」)の入選者となり、また、『投歌選集 過去未来』(河出書房新社)、『日曜歌集 たび』(出版社港の人)などの著書もあり、言葉の感受性に秀でた逸材として活躍中である。

そんな氏のこれまでの道程を振り返り、言葉と取り組む楽しみや喜びをどのように育ててこられたのか、仏友会としては異色の人材の短歌との付き合い方や抱負などをご披露いただく。

お誘いあわせのうえお出かけください。

《ワイン・パーティ》 午後3時20分~5時

個別通知：10月半ばまでにメルアド登録の会員にはe-mailで、その他の登録会員には往復はがきでご案内します。申し込み締切は11月17日。(先着60名)

申込み先：藤倉洋一：fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp

Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子：anzuko@k08.itscom.net

## 《パリ便り》

### 留学生という特権

西村 涼 (国際社会学部 4年)

パリにはたくさん公園があるのに、シアンスポには広いキャンパスがない。私が留学していたパリ政治学院(通称シアンスポ)はサン・ジェルマン・デ・プレ教会の近くという立地から想像できるとおりパリの「中心」に位置し、そのためブティックの間隔を縫うように複数の棟が散らばって建っている。地理的な「中心」のみならず、フランス政治の「中心」を担うのもこのシアンスポである。エマニュエル・マクロン大統領を含め多数の著名人を輩出しながら、留学生の受け入れ数は全学生数の48%をも占める約6000人である。ここに集まる学生は、賢くてチャレンジ精神旺盛で情熱を持った学生が多いように感じたのだが、その中で私は荒波に揉まれながら、留学生という地位を享受し、9か月間勉強してきた。

私はこの9か月間で、「勉強、生活、観光」すべてを満喫することができたのだが、留学生という特権の有り難さをひしひしと感じていた。というのも、昔パリを訪れたときは1週間程の滞在だったこともあって、主要な観光地を回って終わってしまった。それでもこの「ザ・パリ観光」のおかげで私は外大に入学しフランス語を専攻するに至り、今回の留学期間でパリ在住者



## 《新幹事自己紹介》

### 再びフランス語と文化を学ぶ

荒崎直博 (1974/ 昭49)

この度幹事会からお声がかかりその一員として加わることとなった。

1968年に入学したが、ちょうどその年にいわゆる「大学紛争」が勃発、夏休み明けに大学は全学ストに突入した。翌年の機動隊導入によりバリケードが解除されるまで授業もなく、その後まともなキャンパスライフとはかけ離れた学生生活を送った。3年次に休学して「フランス政府保護留学制度」を利用してフランスに留学し、結局2年遅れの1974年に卒業した。

その後総合商社に長年勤めたものの、フランス語が役に立ったのはベルギー駐在の4年間のみだった。会社生活を終えたのを機に、知識の「棚卸し」をしたら東大と留学先で学んだフランス語とその文化が最も興味を引くテーマであることを自覚した。今その興味を満たすべくアンスティチュ・フランセでフランス語を磨き直し、早稲田大学で「フランスの歴史と文化」の授業を受けている。40数年の時を経てようやく学生時代に戻った気分である。

### 居心地の良い場所

吉田尚子 (1994/ 平6)

在学中は劇団を立ち上げ演劇に明け暮れていました。それが「劇団ダダン」と名前を変えて今も存続しているのは嬉しい限りです。卒業後は三井生命に就職して営業を経験。4年後退職し、スカパー！の立ち上げのお手伝いをしたご縁からスカイエンターテイメント(現在は日本



としてフランスでの生活にどっぷりと浸ることができた。パリのほとんどの観光地や美術館はヨーロッパの学生であれば無料で、それらに何度も通うことができたのは学生ビザのおかげである。定期的に地元の小さなマルシェに行けたのは、長期間パリに住んでいたからである。難関試験を突破してシアンスポに正規学生として入学することなど私には到底想像もできないが、そこで勉強できたのも「留学生」だったからである。

初めは周囲との知識量や言語面での実力差に苛まれることも多かった。授業が終わるたびに、「私がシアンスポに来て良かったのだろうか」、「他の学生が吸収する何分の一程の知識しか得られていないのではないか」と考えてしまっていた。沢山の課題にせき立てられるように自分の迷いを無視し、夜遅くまで図書館に残ってみるもの、家に帰るとまた「今日一日うまく行かなかった」という思いが立ち込める毎日だった。そんなふうを考えていても仕方ないとは理解しながら、私の能力ではたった1つの授業にも相当なエネルギーを必要とし、単語帳を開く余力すら生まれてこなかった。

ただ、この状態がずっと続いたわけではない。「1学期が終わったらだいたい慣れてくるから」という先輩の言葉を自分に言い聞かせ、いつも楽しそうなフランス人の友達や、楽観的なトルコ人の友達と話しているうちに、少しずつ自分の中で葛藤が消化されていったように思う。皆課題の多さを嘆きながらも、シアンスポでの勉強を楽しんでいることに気づき、なぜ自分がシアンスポを選びこの講義を受講しているのか再認識することができた。それからは前よりもポジティブに課題に取り組んだり、

映画放送)で働くことに。日本映画専門チャンネル、時代劇専門チャンネルの立ち上げを経験しました。現在は時代劇専門チャンネルの編成に携わっています。趣味は俳句。吉田林檎の俳号でこの秋第一句集「スカラ座」を上梓しました。今年は25周年慶祝行事の世話人も拝命し、外大関係の方と多くお話する機会がありましたが、25年ぶりの方とも初めての方とも心地よい時間を過ごすことができ、外語はやはり居心地の良い場所であることを実感しました。仏友会幹事の皆さんとはいつも楽しい時間を過ごさせていただいております。出来る限りのことをいたしますのでよろしく願いいたします。

### フランスとの縁、新たに

三浦省三 (1977 / 昭52)

卒業後、フランスとの直接的な関わりは2回、最初は83年8月～88年9月に証券会社のパリ駐在員として、銀行、保険会社など現地機関投資家への日本株営業に携わりました。仏語専攻とはいえ、学生時代の不勉強と、前任地が香港だったこともあり、業務は主に英語で通しましたが、当時はバブル経済の好況時で公私ともにパリ生活を大いに楽しみました。次は93年10月～98年3月、この時も香港駐在後の異動で、職責はバブル崩壊後の厳しい経営状況下にあった仏現法のPDGという立場で前回とは様変わり環境でしたが、職務上、仏語を使う機会もあり、パリ生活を満喫、仏料理も堪能しました。最後は本社の自主廃業による現法の閉鎖という不本意な形での離仏となりましたが、いずれも本学卒業のおかげで得たフランスとの縁で、貴重な経験でした。以来、フランスとは多少疎遠になっていますので、幹事の一員として、新たにフランスを身近に感じる機会が増えればと期待しています。



## 昔日の青春 佛友會々報

### 80年のタイムカプセルを開ける 18

坂井英俊 (1965/ 昭40)

遠い先輩方の訴えのいくつかを、現代人たる筆者の思惑を交えずご披露してゆこう。

まず昭和26年当時東京外語会の会長でもあられた滝村立太郎「回顧」<思えば明治30年に誕生してから半世紀長の年月の間には有為転変は免れぬのが常道ではあるけれど、幾度かの火災の為に今日でもなお満足な校舎は持てず。あちらに借家こちらにバラックという風で暮してきたのだがこれから出た卒業生は世界至る處に雄飛して活躍し、日本人としての気魄を各所に示したのである。我が校は明治27～28年日清戦争後、良識の士が外国語を盛んに学び海外の知識を獲得しなければならぬと悟り、時の国会に建議してその結果、明治30年4月22日設置されたのである。明治38年、日露戦争の時は露語科本校三年生は勿論、二年生まで徴発され、支那語科の者も何人か召集された。その後、尼港事件にも第一次世界大戦にも引き出されたが、最近の世界大戦ほど本校卒業生の働いたことはないだろう。兵隊として又は通訳としては勿論のこと、その他実業界官界通信等あらゆる方面に活躍したのである。さりとて我が校は決して軍部所属でもなければ御用学校でもなかったのである。大戦前には軍部から委託学生も多数来し、終には軍教(軍事教練?)などがあって、私らは苦い顔をしていたものである。軍のためには多少のことをしても、少しも便宜を与えてくれなかった。即ち吾校は財政上にも恵まれなかった。文部省管下い

つも継子扱いにされていたのである。吾校の当初は英仏独露西韓の六か国語だけであった。入学生の大部分は浪人者で英語科等は教員が多かった。仏独等は高等学校、高等商業等の脱落者でまだ若い。露西は肩を聳やかすような書生肌の者が多かったが、大体外国の知識を容れる人物なので、神田界限ハイカラ学校の名が早速広まってしまった。何しろ帽子の徽章も七宝と来ているから。

話変わって当初小さな学校なので大いに世間の認識を高めようと、宣伝の方法として各国語の語劇を催して朝野の紳士淑女を招待したのである。役者が見物にくるやうになって新派劇の参考にされた。又仏語科について云へば、本校の為に仏語仏文熱が盛んになって、対抗的に東大の仏文科が盛んになるし、同志の白水社(白水社?)等といふ仏書専門の書店もできるし、京大まで仏文科が飛んで行くやうに成った。吾校にも仏語仏文科が出来たが非才思ふにまかせずその方面の人材は余り出て居ない。併し仏文も書けず他の文学史か評論も読んでそれを発表した処で、文士でもなからうし生計のためには翻訳する位が落ちであらう。開校最初の年は語学ばかり午前4時間であった。次年我々在校生、他の学科目をいれてもらふやうに文部省に運動して、国語・文学史・国際法・経済・法学通論、第二外国語として英語をならふやうになった。その後種々科目を増し語学科も多くなった。第一次世界大戦後、ときの大蔵大臣勝田主計氏、外国語学校不用論をとらへ、貿易拓殖語学校にするとの噂に校名存続運動を起し、又貿易拓殖科目の為に年限運動をなして四年制度となった。併し最近の戦時中、三年制の外事専門学校に改められ、戦後教育制度の変改の故とは言ひ乍ら、東京外

授業自体を楽しんだりできるようになったと思う。不思議なことに、根を詰めて取り組んでいた時よりも、自分が面白いと思える内容がずっと入って来て、授業後もその内容を調べたり復習したりする意欲が自然と湧いて来た。しまいにはあらゆる面で、「留学生というステータスを最大限に使う！」とまで思えるようになった。

留学後半は、「Sciences Po Refugee Help」という難民支援団体の活動に参加したり、友達と話す時間を増やしたりと、自分がシアンスポにいるうちにやりたいことは何でも挑戦するという意気込みの下、勉強以外のことにも取り組んだ。長い時間をかけてようやく、自分のやりたいことを中心としたプランニングができるようになった。

留学中の私は、講義・レポート・プレゼンと目の前の課題に必死だったため、決して余裕があったわけではないし、今このように書けるのも喉元過ぎて熱さを忘れたからかもしれない。私も留学中多くの人が直面するような悩みを同じように辿って来ただけで、留学前後での変化は楽観的かつやや自己中心的になったことだけかもしれない。ただ、その変化は自分にとっては必要なものだったと思えるし、自分なりの留学の意味を今後さらに見つけられると信じて、この経験を少し自信とこれからの活力にしていきたい。

ちなみに2022年にはパリ政治学院のキャンパスが新しくなるようで、広場を備えた開放感のあるデザインになるとのこと。3年後の派遣留学生は新キャンパスで授業を受けられると思うと、とても羨ましい。

## 《振込手数料の値上げに伴うお願い》

通信費をゆうちょ銀行の仏友会口座にお振込み頂く場合、振込手数料は仏友会の負担とさせていただきますが、以下のように今年4月から通常振込手数料が大幅値上げとなりました。

<通常振込(振込金額5万円未満)>	3月まで	4月以降
窓口	130円	200円
ATM	80円	150円

そこで、**仏友会の支出を抑える**ために、以下の方法が考えられます。  
(1) 数年分を一括してお支払い頂く。  
(2) 窓口ではなくATMをご利用頂く。  
(3) ゆうちょ銀行に口座をお持ちの方は、月一回の手数料免除を利用してご自身の口座からお振込み頂く。

上記の事情をご理解の上ご協力賜りたくよろしく願いいたします。

## 仏友会会計報告

(2018年4月1日～2019年3月31日、単位：円)

取 入	支 出	
<b>前年度繰越金</b>	837,734	
総会会費	295,500	総会費用 338,056
受取通信費	218,000	「LA NOUVELLE」発行費用 143,797
サロン仏友会会費	218,500	サロン仏友会費用 184,726
		大学語劇お祝い金 30,000
日本郵便賠償金	9,900	
		ゆうちょ銀行振替手数料 7,070
通常貯金利息	6	雑費 667
合計	1,579,640	合計 703,649
<b>次年度繰越金(*)</b>	875,991	

(*) 内訳	ゆうちょ銀行通常預金	613,040円
	ゆうちょ銀行受払口座	232,535円
	手持ち現金	30,416円

国語大学と云ふ未曾有のものに変化して、外国語学校なる実体はあはれ半年の命となったのである。思へば懐かしの吾校よ！汝は我と共に、人生五十年を過ごしたのである。>

増田俊雄「外語時代の思ひ出」<雨の日の昼休みなどには、今は自由党の重鎮である旧友増谷君を囲んで酒の礼讃談義を面白く聴いたりした。旧友相たずさえて先輩の中川豆介先生訳にかり、川上音二郎夫妻が主演するところのヴィクトリアン・サルドウの「ラ・パトリー」劇を明治座かへ見に行って新しがったりしたこともあり、修学旅行で箱根を湯本へ向かっておる道すがらでは、ベルギー人夫妻と連れになって、フランス語実地練習のひと時を味わい、フランス語の動詞の変化は厄介だが丹念に暗記せよと諭されもした。後年はからずも外語の教壇に立つ身になってからは学生諸君とともに勉強をし且つ語り且つ飲むといふ愉快地に浸ったことがかなり多かった。先生らしい偉そうな顔をして済ますことが下手でもあり嫌いでもある自分にとっては楽しく過ぎたが、日支事変の前後から非民主化させられていった母校には、顧みてほほ笑ましい思ひ出といふものは一つもなかったと云へるであらう。> 菱山修三「思ひ出の一齣」<廿年を経た今日でも、ぼくを教育してくれたのは、教室ではなく図書館だったやうな気がする。堀口大学さんには私生活に立ち入ってその後お世話になった。> 以上が書かれたのは明日をも知れぬ敗戦直後の混乱期である。東京外語の名さえ出たり消えたり時代に、先輩方は不屈にもこの「仏友会会報第一号」を再刊した。物資の無い時代、触れば破れそうなら半紙のホッチキス止めである。

<次回へつづく>